A R P A K ・ N E W S L E T T E R

アルパック ニュースレター

VOL192　2015年8月1日 ISSN 0918-1954

広島平和記念碑　原爆ドーム（本文中に関連記事があります）

目次／contents

ひと・まち・地域

奥河内ビュッフェレストラン TERRA がオープンしました ／鮒子田稔理・三浦健史・原田弘之 2

地域から少子高齢化への対応を考える（その 11）～「地方消滅を考える～ ／森脇宏 4

明石の本町商店街で景観ガイドラインを策定しました／橋本晋輔 6

特集「戦後 70 年・まちに残る戦争の記憶 / 記録を巡って」

伝承譜 ／三輪泰司 7

原爆目標としての京都 ／長沢弘樹 13

きんきょう

初めてのミラノ、フィレンツェ、クラクフ～京都商工会議所会頭ミッションに参加して～ ／杉原五郎 14

天空都市「マチュピチュ」へ～チャスキが走ったインカ道の魅力～ ／岡崎まり 15

メディア・ウォッチ

『三度戦争に行った父と私の物語』 鮒子田稔理 17

まちかど

語りつぐべき戦争の記憶 ／中村孝子 18

奥河内ビュッフェレストラン TERRA がオープンしました

建築プランニングデザイングループ／鮒子田稔理・三浦健史
地域イノベーショングループ／原田弘之

大地の恵みをおいしく食べるレストラン

7月18日、河内長野市高向に待望のレストランが完成し、奥河内くろまろの郷はグランドオープンを迎えることができました。

レストランはどのような料理を提供するかによって、レイアウトや厨房機器が大きく変わります。そのため、指定管理者が決定し、その意向を組み込んだ上で設計に取り掛かりましたので、他施設よりも約7ケ月遅れのスタートとなりました。

店名はイタリア語で「大地」を意味する「terra」と、テラコッタドール（※注）の「テラ」を合わせたネーミングで、「大地の恵みをおいしく食べる」という意味が込められており、河内長野産の新鮮な野菜を中心とした和洋折衷の創作料理やスイーツがビュッフェ形式でいただけます。

今回厨房とは別に、客席に近い場所にアイランドキッチンを設け、シェフが料理を仕上げるところを見ることができるライブ感あふれるキッチンとしました。また子ども連れのお客様も多く見込まれることから、子どもが自分で料理をとることができるよう一段低いカウンターを設け、キッズコーナーとしました。子どもが大好きなタコさんウインナーやポテトフライが小さなフォークやスプーンとともに並べられています。

ハンモック

隣接の奥河内ビジターセンターと同じように外壁や内装には河内材を使用し、木のぬくもりを感じることができる仕上げとしました。

客席のサッシは季節の良い時期にはフルオープンすることができ、テラス席と内部の客席を一体化することができます。テラス席の向こう側には田園風景が広がっています。ハンモックも設置されていますので、食後のシエスタを楽しむことができるのではないでしょうか。

薪ストーブ

河内長野市は市域の7割が森林であり、その7割が人工林となっています。この森林を健全な状

外観

窓辺のソファーコーナー

アイランドキッチン

キッズコーナー

薪ストーブ

態で維持していくためには間伐は欠くことのできない作業です。この間伐材を有効に利用し、クリーンで再生可能なバイオ燃料への転換を促進するため、河内長野市では市内公共施設への薪ストーブの導入を行っており、今回このレストラン「TERRA」にも設置されました。建物全体を暖かく包むストーブは秋から冬にかけての楽しみとなりそうです。ストーブの上で野菜たっぷりシチューがコトコト煮込まれる風景も見ることができるかもしれません。

手づくり作品の時計

ちかくて　ふかい　奥河内

レストランのオープンにより、奥河内ビジターセンター、ＪＡあすかてくるで河内長野店、奥河内ビュッフェレストラン TERRA の３施設が揃いました。

奥河内ビジターセンターのカフェコーナーでは河内長野産のトマトやフルーツを使ったジュースや野菜を使ったピザやパンが好評です。

多目的コーナーでは、手作り品の展示販売会やトンボ玉作り体験などの催しも随時行われています。夏休みには子どもが喜ぶ昆虫夜間観察会や生きものイベントなども行われ、楽しみながら学ぶことのできる場となっています。

待合コーナー

大阪府立花の文化園や木根館、くろまろ館といった周辺施設や関西サイクルスポーツセンターなどとの連携により、四季折々、いろいろな世代がそれぞれの楽しみ方を見つけることができるエリアになっています。

「ちかくてふかい奥河内」で自分の楽しみ方を見つけてみてはいかがでしょうか。

＜奥河内ビュッフェレストラン TERRA ＞

●営業時間：午前 11 時～午後 4 時
●大人（中学生以上）　1,500 円
●子ども（小学生）　800 円
●幼児（３歳以上）　500 円
●シニア（65 歳以上）　1,400 円
※ 90 分の時間制 （税抜）
住所：大阪府河内長野市高向 1218 番地 1
電話：0721-53-3030
ＨＰ：http://okukawachi.or.jp/

※注；テラコッタドールとは、素焼きの植木鉢で手作りする人形のことで、河内長野市では「みんなで一緒につくるまち」を協働の合言葉に普及活動が進められています。

大きなテーブルもあります

地域から少子高齢化への対応を考える

その 11 ～「地方消滅」を考える～

／代表取締役社長　森脇宏

本稿「地域から少子高齢化への対応を考える」を連載し始めたのが 2013 年 6 月号で、翌年の 2014 年 5 月、増田寛也氏（元総務大臣）が座長を務める日本創生会議が「ストップ少子化・地方元気戦略」を発表し、その内容は「地方消滅」（中公新書）として出版され、大きな話題となりました（以下その内容を「地方消滅」と略します）。私が認識している少子化問題は、「地方消滅」で取り上げられている人口減少と問題意識が通底していますので、「地方消滅」の論点を簡単に紹介しながら、その内容について考察してみることにします。

「地方消滅」の人口予測

「地方消滅」では、「このままでは 896 の自治体が消滅しかねない」と警鐘を鳴らして、大きな話題になるとともに、様々な批判がありました。私なりに整理すると、「2005 年～ 2010 年の傾向がそのまま続くとして予測していいのか」という批判に集約されると思います。

我々が携わる地域計画では、「予測＝計画」ではありません。このまま推移すれば、どういう問題が生じるかを具体的に把握し、対策を講じるために予測することが多く、予測はあくまでも「このまま推移すれば」という仮定の下での試算でしかありません。したがって、上述の批判は当たらず、もし批判するのなら、「地方消滅」の予測結果を、あたかもそうなるかのごとく煽って報じたマスコミだと思います。

自治体の人口動態は、自然増減（出生と死亡の差）及び社会増減（転入と転出の差）があわさったものです。一貫して社会減が続いていても自然増でカバーして、緩やかな人口減少が続いている自治体が、自然増減がマイナスに転じるや否や、人口減少が急速に進むという事例は結構あります。そのときになって騒がなくてもいいように、今後の危機を予測しておくことは、とても重要なことだと思います。

「地方消滅」の国家戦略

それでは、予測された人口減少に対して、どのような対策が考えられているのでしょうか。「地方消滅」では、地方に着目した国家戦略が必要であると記され、東京一極集中対策と少子化対策の両面から論究されていますので、それぞれの内容を簡単に確認しましょう。

まず、東京一極集中に歯止めをかける国家戦略として、地方からの人口流出を食い止める「ダム機能」を構築し直すと記されています。そして「選択と集中」の考え方から、広域の地域ブロックごとに人口減少を防ぐことを考え、地方中核都市に資源や政策を集中的に投入し、地方がそれぞれ踏ん張る拠点を設けることが提案されています。

一方、少子化対策の国家戦略としては、出生率を高めることが重要であるため、出生率低下の大きな原因である経済的基盤に着目し、「若者・結婚子育て年収500万円モデル」が謳われています。そして、非正規雇用などを問題視し、若者世代の雇用安定化のため、非正規雇用のキャリアアップと処遇改善等が記されています。さらに、子育て支援等の諸施策も提案されています。

以上が「地方消滅」における国家戦略の簡単な論点ですが、これらについて私見を述べてみます。

多様に考えるべき「ダム機能」

まず、東京一極集中に歯止めをかけるため、地方の「ダム機能」として、広域ブロックや地方中核都市に着目されていますが、ダム機能は、もっと多様に考えるべきだと思います。

例えば、県庁所在都市の 2005 年～ 2010 年の人口増減をみると、東京都を除く 46 市のうち半数の 23 市が人口減になっています。

県庁所在都市でも 5 割しか人口が増加していない実態をみると、地方中核都市だけでダム機能が全国に形成されると考えるのは無理があります。確かに、地方中核都市が周辺都市等を支えている事例もありますので、地方中核都市に期待する場合もある

表 1．県庁所在都市の人口増減（2005 年～2010 年）

	人口増加都市	人口減少都市
都市数と都市名	２３市 札幌、仙台、水戸、宇都宮、さいたま、千葉、横浜、富山、金沢、名古屋、大津、大阪、神戸、岡山、広島、高松、松山、福岡、熊本、大分、宮崎、鹿児島、那覇	２３市 青森、盛岡、秋田、山形、福島、前橋、甲府、新潟、福井、長野、岐阜、静岡、津、京都、奈良、和歌山、鳥取、松江、山口、徳島、高知、佐賀、長崎

資料：国勢調査（各年）

でしょう。しかし、その期待に応えうる地方中核都市ばかりではない実態もあります。

したがって、広域ブロックや地方中核都市のような大規模ダムだけでなく、小規模ダムや遊水池、水源涵養など、多様なダム機能があっていいのではないでしょうか。具体には、地方中核都市のように周辺をリードすることはないが、独自に自律した経済力を持った地域づくりもあり得ると思います。

事実「地方消滅」の後半で、「地域が活きる６モデル」として2040年までの若年女性人口増加率ベスト20を選定し、それらを６つのモデルに分類していますが、その中で「カギを握る産業開発型」として、地域の特徴ある資源を活かした産業振興を実現し、雇用の拡大や住民の定着を実現しているモデルが示されています。これが多様なダム機能のもう一つのあり様だと思います。

表２．地域が活きる６モデル

名称	考え方
産業誘致型	工場や大規模商業施設等の誘致・立地で、人口流入を実現させている
ベッドタウン型	大都市や地方中核都市の近郊に位置することを活かし、定住人口を増加させている
学園都市型	大学や研究機関等を集積させ、若年人口の継続的流入を実現させている
コンパクトシティ型	街の機能を中心地に集約し、ローカル経済圏としての効率化を目指している
公共財主導型	国家プロジェクト規模の大規模施設の立地を契機に、人口減を防いでいる
産業開発型	地域の特徴ある資源を活かした産業振興を実現し、雇用の拡大や住民の定着を実現している

資料：「地方消滅」（2014年、増田寛也編著）より作成

「地方消滅」では、このようなモデルの例として、秋田県大潟村、福井県鯖江市、北海道ニセコ町、岡山県真庭市が紹介されていますが、これらは地方中核都市ではありません。地方中核都市に依拠するモデルだけでなく、各自治体が経済的自律をめざすモデルも視野に入れるべきだと思います。

なお、「地方消滅」に対する批判として、「人口減少に抗した取り組みが、全国で数多く取り組まれているのに、その内容を無視している」という論がありますが、こうした指摘も視野に入れると、「地方消滅」の中で紹介されている前述の幾つかの事例に加えて、さらに多くの優れた事例を掘り起こし、全国に広めていくことが実践的な課題だと思います。

結婚できる経済的基盤をつくる国家戦略

「地方消滅」では、少子化対策として、出生率を高めるため若者の経済的基盤を重視し、「若者・結婚子育て年収500万円モデル」を謳い、非正規雇用などに論究されています。筆者も、少子化対策の分析で同様な認識に至り、最も重要な課題だと考えています。ただ、本稿が「地域から‥‥考える」と地方行政に即して考察していることから、この問題にはこれまで敢えて踏み込んできませんでしたが、「地方消滅」では国家戦略を述べるのですから、この点については、ずばり切り込んで、派遣労働者をはじめとする非正規雇用者を増やしてきた労働政策を転換すべき、と主張してほしかったと思います。

「地方消滅」を乗り越えて

「地方消滅」の出版以降、「まち・ひと・しごと創生」が急速に政府の重要課題となり、50年後に１億人程度の人口を維持するための「長期ビジョン」と、人口減少克服・地方創生のための５か年計画「総合戦略」が昨年末にまとめられ、各省庁や地方自治体が、これらの施策を先行的に実施しうるような補正予算3,275億円が組まれました。そして、この補正予算の一部を用いて、全自治体が地方版の人口ビジョンと総合戦略を策定するよう、都道府県には一律２千万円、市町村には１千万円の交付金が渡され、我が社も、数多くの策定支援業務を受託しています。

せっかくの検討機会ですので、有意義な成果を出したいと思いますが、全体として、内閣府が求めている策定の取り組みは急ぎすぎの感があり、どこまで深めた提案ができるのか、疑問に思える状況もあります。そもそも人口減少問題は、「地方消滅」が出版される以前からの大きな問題で、地域で頑張る方々を励まし、力をあわせていく取り組みを地道に積み上げていくべきですので、今回の策定支援業務だけにとらわれず、多様な処方箋を工夫し、お手伝いしていきたいと思います。

明石の本町商店街で景観ガイドラインを策定しました

都市・地域プランニンググループ／橋本晋輔

明石市では平成22年度に中心市街地活性化計画を策定して以降、中心市街地活性化の取り組みの一つとして継続して景観づくりに取り組んでいます。今回、その取り組みの一環として本町商店街が主体となり「本町商店街まちなみ景観ガイドライン」を策定しましたのでご紹介させていただきます。

大きく変わる本町商店街

明石といえば明石焼きや魚の棚商店街、港から望む淡路島の眺望など、海に関する有名な資源がいくつかあります。しかし、それらの資源をにぎわいづくりに十分に活かせておらず、明石駅から南に行けば行くほど通行量が少ないという状況の改善が中心市街地の大きな課題となっています。明石駅からほんの10分ほど行けば海が見えるのですが、それを知らない方も多いようです。そのような中心市街地の南端に位置しているのが本町商店街です。

本町商店街は歴史ある商店街で老舗の店舗がいくつか立地している他、1947年に開館した成人映画館「本町日活」もあり、どこかなつかしい雰囲気を感じさせる商店街です。その本町日活が大衆演劇場「ほんまち三白館」として今年の年末に生まれ変わることになり、その機会を商店街が変わる大きなチャンスととらえ、景観という切り口で商店街の個性化に取り組むことになりました。

商店街の「深み」を知ってほしい

景観ガイドラインの検討は、本町商店街の役員を中心に行いましたが、話し合いは最初から難航しました。まず1回目の会議で出た意見は「商店街の目指すべき景観といっても業種も建物の意匠もバラバラだし、一括りにはできないよね」。商店街として目指すべき方向性を共有するのは当然のことですがなかなか難しいことです。それでも、景観づくりの具体的イメージを提示しながら議論を重ねることで、「個性的な専門店が多いこと」「歴史のある老舗があること」「地域の交流の場であったこと」が本町商店街の特徴であり、それを知ってもらうことが大切だということを共有することができました。ガイドラインでは、その専門性や歴史性を商店街の「深み」ととらえ、本町商店街の将来像を「深みが感じられる交流商店街」としています。

老舗が点在する商店街

ほんまち三白館

ちなみに、「ガイドライン」という名前ですが冒頭の意見のように商店街として一律の規制をかけることには違和感があるという意見が最後まであったため、ガイドラインの中身は「必ず守ってほしいこと」（規制すること）と「できれば取り組んでほしいこと」（伸ばすこと）に分けて基準を示しています。

「深みが感じられる交流商店街」という特徴を目指して

さて、ガイドラインを作ることはできましたが、この成否はこれをいかに運用していくかにかかっています。これから改築等の申請があがるたびに、商店街がガイドラインを元に判断していくことになりますが、実際にガイドラインに適合しているかを判断するのは難しい作業です。地元の工務店の方も巻き込みながら運用していく仕組みを検討していますが、商店街側でも自分たちの目指したい商店街の姿とはどのようなものなのかをさらに考えていくことが必要になると思います。

今回、景観という切り口ではありますが、個性的なお店で構成されている商店街という組織において、商店街の特徴が何で、目指すべき姿がどのようなものなのかを改めて考える機会ができたことに私自身は意義を感じています。ガイドラインは基本的に受け身なものですが、今後はこれを活かしながら、景観づくり、賑わいづくりの取り組みをいかに進めていくか、またそのための担い手をどうするかが課題になってくると考えています。ほんまち三白館がオープンするこれからが正念場です。これから変わっていく本町商店街に期待していただきたいと思います。

特集

特集「戦後70年・まちに残る戦争の記憶／記録を巡って」

伝承譜

名誉会長／三輪泰司

特集「戦後70年・まちに残る戦争の記憶／記録を巡って」

西暦2015年の今年は、1945年に第二次世界大戦が終わってから70年の節目の年です。今号では、アルパックの基盤である京都と大阪を中心に、原稿の一部だけで言及する場合も含めて、今もなお残る、戦争の記憶と記録を巡る記事を集めました。

今号の三輪名誉会長の原稿は、「伝承」と「継承」がキーワードとなっています。継承した側から伝承する側へと変化するということは、すなわち、自らの持つ「記憶」という特権的な経験を、「記録」という形式の普遍的なものへと変化させることです。

これはつまり、日常生活の中で戦争の記憶を理解できた時代が終わり、戦争の記録を改めて学ばない限り理解できない時代になったということではないでしょうか。こうした時代においてこそ、とりわけ我々のような職能にとっては、記録という普遍的なものの重要性が高まっていると思います。

今号の特集が、皆さまの記憶を辿る、或いは、記録を理解する。そのための手伝いとなれば幸いです。

ニュースレター編集委員／長沢弘樹

6月26日、「西陣空爆犠牲者追悼献花式」に参列しました。

10年前、地元出水学区の住民が、上京区智恵光院通下長者町の辰巳公園の一角に「空爆被災を記録する碑」を建てました。公園は空爆の跡です。追悼献花式は、出水住民福祉連合協議会が主宰者に加わり、空爆の時刻―午前11時30分から催されました。新聞・テレビがたくさん取材に来ました。雨の中、報道によると160人もの方がお参りされました。

戦争の惨事忘れない

上京で「西陣空襲」献花式

警報、爆弾落下…「強烈な体験」

「西陣空襲」から70年を迎え、爆弾の破片が添えられた石碑に手を合わせる住民ら　出典：京都新聞（平成27年6月26日）

「戦後70年」今、何が問われているのでしょうか。門川大作市長が式の挨拶で言われた「二度と戦争を起こさないと誓うことが、最高のお悔やみになると思う」がこの時、この地での答えであることは確かです。

15年戦争と“ものごころ”　―　伝承と継承

「戦後70年」と問題提起を受け、70年前、ここで何があったのか、その時と以後、自分は何をしてきたのか、何をなすべきなのか、そもそも「戦後」とは何なのか、たくさんの課題を頂きました。

私は、1931年・昭和6年生まれの未年。この8月27日で満84歳になります。生まれて23日後の9月18日、柳条湖事件で、満州事変勃発。大東亜戦争即ち、第二次世界大戦が終わったのは、満15歳になる12日前。“ものごころ”が付くまで、いわゆる「15年戦争」とともに育ってきました。15年間、この国は戦争が日常的常態でした。ほんの1・2年の違いで生死が分かれる時代をくぐり抜けてきました。

伝承・継承、英語では、succession、動詞ではsucceed ですが、伝える側を「伝承」、伝えられる側を「継承」とします。両方があって成り立ちます。今、私は主として伝える「伝承」側にいます。しかし、元は伝承を受ける「継承」側でした。自己中心の子供、幼稚な少年、世間知らずの若者でした。

「伝承」の責務を果たすために、何を、どのように「継承」してきたのか、どのように“ものごころ”を付けてきたのかを押さえておかねばならないでしょう。

戦後、大変革の一つに「家族制度」の解体があります。一族一家の親父が威張っていた、封建的な家父長制が、天皇を頂点とする国家主義・軍国主義の基礎であったとして、否定されました。

しかし、人間社会は夫婦・親子・兄妹から始まる部族社会・血縁社会・地縁社会が基本であることはどの民族でも変わりありません。地縁社会の基礎であったコミュニティ＝隣組まで、国家主義的支配に利用したことに誤りがあったのです。現代社会は、学縁・社縁、同好縁、さらに、バーチャル縁と拡がって忙しいですが、“ふるさと”が血縁・地縁のみなもとであることも変わりありません。

「戦後70年」の機に、視座を“ふるさと”に据えて、「継承」から「伝承」へ、立場と責任の変化

に応じた自分自身の行動を検証してみたいと思います。先ず、現実に体験したことからはじめましょう。

隣に爆弾が落ちた　―　未熟な継承者

その日、70年前の昭和20年6月26日、京都には朝から空襲警報が発令され、自宅待機していました。私は満14歳10ヶ月。中学校の二年生になったばかりでした。出水学区の北主税町の家には、父が一人で暮らしていて、私は現場から直線距離で800メートルほど東の、中立学区仲之町の祖父の隠居に住んでいました。昼前、警報が解除されたので、表に出てみました。爆音がするので、ふと見上げると、北々東の雲の間から1機のB29が現れ、ものすごく大きく見えました。高度1,000メートルくらいでしょうか。胴体から黒いものをバラバラと吐き出しました。“ザーッ”とトタン屋根に砂を撒くような音。「バクダンや！」慌てて家に駆け込み、鉄カブトをかぶって縁の下にもぐり込みました。と同時にズズーンと地響き。家がグラグラと揺れ、壁土がバラバラと落ちてきました。てっきり隣に落ちたと思って表にとび出しました。西隣の家は無事に建っていました。西の方に白い煙が上がって、ふすまの切れ端やら、屋根のトントン葺きが降ってきました。急いで現場へ走って行きました。警察が縄張りをして近寄れませんでした。父は警防団の役員をしていて現場へ駆けつけていたはずですが、会っても何も話しませんでした。戦後、だいぶん経って、ボツボツと話しました。出水校の体育館にゴザが敷かれて、死体がずらりと並べられていた。男女の区別もつかなかった。手や足がちぎれ、はらわたがはみ出て、目も当てられなかった、と。6月30日に正親小学校で犠牲者の合同葬が行われたそうです。今回、京都新聞に当時の写真が掲載されていました。

西陣空襲3日前の23日、沖縄では組織的な戦闘が終っていました。そんなことは、全く知りませんでした。6月13日、大阪では、深夜からの大空襲で、京都からも西南の空が真っ赤に染まり、翌日は太陽が黄色になり、焦げ臭い匂いに覆われました。数日すると大八車やリアカーに家財道具を積んで、京都へ逃れてくる避難民がいっぱいでした。8月14日まで続く大阪大空襲であることは、戦後に知ったのです。

中学2年のミワくん、観察眼・記憶力に優れ、反射的な行動力もありますが、世の中で何が起こっているのか、全く分かっていませんでした。感覚の発

西陣の空襲で落ちた爆弾の破片（山中油店／上京区）

達に対して意識は未発達で、調べることまでは到らず、記録もしていません。幼児や少年に、調査や記録を要求するのは無理で、親や先輩・教師が引き受けるべきです。子どもの絵や作文、成績書を残しておきましょう。

「献花式」で、青少年期、4歳くらいも違うと、意識も行動も違っていた人物がおられたことを知りました。

事実を調べ記録する　―　伝承のための真実探求

磯崎幸典さんは、地元で社寺の瓦を主に扱っている瓦屋さんです。ご自身はその時、京都大学で働いていて爆撃を免れ、家族も無事でしたが、家は全壊しました。「空爆被災を記録する碑」は、磯崎さんが私費で造られ、住民福祉連合協議会が請願し、市会議員が応援して市の児童公園に建てることができました。10年前、2005年8月16日、時の桝本頼兼市長も参列されています。当時の新聞記事があります。

磯崎幸典さんは、今年87歳で「もうこれが最後になるでしょうが」と前置きして「真実」を調べ、記録し、伝えることが大事だと話されました。記録に選んだ石碑は古来確かめられている方法です。

直後に調べた爆弾の落下ポイントを、街路図に○で示し、警察記録によって、死傷者は、即死43人、重傷13人、軽傷53人、計109人、被害家屋は、全壊71戸、半壊84戸、一部損壊137戸、計292戸、罹災者850人と記されています。死者は重傷者1人が亡くなり44人であること、50キロ爆弾7発の内、1発は昌福寺の井戸に落ちて不発だという通説は誤りで、井戸の中で爆発したことを、破片を引揚げて実証されています。焼夷弾でなかったので火災は免れました。爆弾であったのは、目標は軍事施設か工場であったのが、エンジントラブルで予定外の投下であったと分かります。従って計画的な「空襲」ではなく「空爆」と表現しているのです。

70年前、爆弾が落ちた位置、犠牲者の数、ただその事実を確かめる行為すら、憲兵隊や特高警察の目を憚らねばならず、ただ亡き隣人たちの数を記し、霊を慰めたいという願いを、いしぶみ－石碑の形にして実現するのに、60年も掛りました。

1986年（昭和61年）3月2日、からすま京都ホテルで、小学校の同窓会「出水の会」創立総会が開かれました。出水尋常小学校・第56期・昭和13年4月入学生の学籍簿をお借りして、229名へ案内しました.。参加者は先生方を合わせ70名でした。

「西陣空襲」の被害の様子を伝える写真
出典：京都新聞

地元住民が建立した西陣空襲の犠牲者を悼む石碑
出典：京都新聞

この時、私は、自分の職能を活かそうと、住宅地図を貼り合わせ、小学生の時、仲間たちは何処に住んでいたかプロットし、出欠通知で記されていた住所と照合してみました。

出水学区は、西陣地域の南端で、織物と関連の職人の町でしたから、男子では家の跡継ぎをしている者、女子は相手となる男性が戦没したため独身で通している人があって、元の家に住んでいるケースが多い中で、空白のエリアがありました。辰巳町、天秤丸町、坤高町、東白銀町あたり、空爆の跡です。この付近は、聚楽第の跡で、城郭や武将の屋敷に由来する地名が多いのです。法務局の登記簿、区役所の戸籍謄本を併せて追跡したら、罹災した家族と住居が分ったかもしれません。記録を繋ぎあわせる人々の記憶を組織するには、荷が重すぎて果たせませんでした。当時、出水小学校の生徒の大部分は、宮津へ集団疎開で行っており、空爆犠牲者には、警報発令で自宅にいた同期の中学校生徒が多かったと推測されます。

情報伝承について一言。戦時中の「大本営発表」をウソの代名詞みたいに言いますが、情報を隠す、歪めるより、最も罪なのは、隠滅・破棄することです。「戦後」直後にどこからかの命令で、中学校の銃器から武道具まで、穴を掘って埋めました。（密かに面と篭手だけ救いだしました。面の“黒紐”で、中学２年にして剣道の有段者になっていたことが証明できます。）予想以上のスピードで東西から首都まで攻め込まれたドイツと違って、日本はポツダム宣言を受諾しますと言ってから、降伏文書調印・武装解除まで２週間以上ありました。書類・フイルム等の焼却は徹底していました。命令の「証拠」が出ないのは当然です。

次代に、記録保存を「伝承」します。未来への指針であり、手間と費用は、貴重な資産となるのです。

ヒロシマを知る　―　まだ「戦後」ではなかった

私が大学へ入ったのは、「戦後」5年。1950年（昭和25年）４月。満18歳７ヶ月でした。黄檗にある宇治分校の最初の学生でした。元陸軍の弾薬庫の跡です。

初代分校主事は、平澤興先生で、「京都大学を全部、宇治へ移す」と意気軒昂たる演説をされました。ところがその６月、朝鮮戦争勃発。８月には「警察予備隊」後の自衛隊ができて、宇治キャンパスへ進駐し、真ん中に鉄条網を張り、カービン銃で、学生どもを東半分へ締め出しました。西半分には桜並木や池があったのに。平澤興先生の夢は、あえなく消えました。

今、私が住んでいる桃山南学区は、宇治弾薬製造所木幡分工場の跡です。ここから完成した砲弾を、黄檗の弾薬庫へ運んでいました。因みに、弾薬製造所を設計したのは、西山夘三技術中尉でした。

当時は「工学部」として入って１年後の３月、「学科配当試験」があって、希望する学科へ分れるという仕組みでした。吉田キャンパスの建築学教室で、いきなり遭遇したのが、破壊された広島の街でした。「綜合原爆展」です。

理学部学生が原爆の原理を、医学部学生が原爆症を解説し、建築学生がパネルと模型の制作を担当したのです。後に阪大教授になられた岡田光正さん、京大助教授になられた絹谷祐規さんら諸先輩に模型の作り方を教わりました。

1951年７月22日から、京都駅前の丸物百貨店（今のヨドバシカメラの所）で開催。万を越える市民が押し寄せ、以後各地で巡回展が持たれました。1951年７月と言えば「戦後」５年11ヶ月が経っています。しかし、まだ講和条約調印前です。「綜合原爆展」は、連合軍占領下の出来事だったのです。

戦闘、即ち武力行使は、1945年８月14日、ポツダム宣言を受諾し、９月２日、東京湾のミズーリ艦上での降伏文書調印でもって終わりましたが、まだ「戦争」状態は続いていて、軍事占領の下にあったのです。連合国の日本占領は間接統治方式を採り、日本政府の法令の形をとっていますが、マッカーサー司令官の「命令」を実行していたのです。

「戦闘」終結から、講和条約が発効し、命令による法令が廃止され、一応、主権を回復し、独立国になるまで、約６年８ヶ月間掛っています。1947年に貿易が許されましたが、主権回復までのおよそ５年間、日本製品にはすべて Made in Occupied Japan（占領下日本製） の表示が義務付けられていました。ブリキのオモチャにまで、この文字があって、日本人は、敗戦国民であることを思いしらされました。

「戦後」とは何時から言うのでしょう。主権回復からですと、今年は「戦後63年」です。

私たちは、核物理学、放射線医学の知見は人類共有の財産だと、純心に取り組みました。パネルやパノラマ模型で、分りやすく表現するスキルを身に付

けることもできました。理学部・医学部に信頼しあえる友を得ました。彼らは後に京都大学の教授になり、京都南病院や桂病院の院長さんになりました。

以来、広島へ行くたび、広島平和記念碑―原爆ドームをスケッチしています。1996年12月、ユネスコの世界文化遺産に登録されました。

破壊された街とはいえ、現場を見ずに模型を作ったことが、気になっていました。1952年３月、友人と二人で広島から長崎へ行きました。夜行列車で広島駅に着いて、プラットフォームから見ると、駅前にはバラックの闇市。その向うに原爆ドームが見えました。泊る所がないので宮島まで行き、翌日また夜行で長崎へ行きました。廃墟となった浦上天主堂のあたりは工場地帯で、グニャグニャになった鉄骨がそのままでした。中華街へ行くと、たいへんな活気。華僑のバイタリティが溢れていました。

今井正監督の「どっこい生きている」という映画がありました。内容は憶えていませんが題名が気に入りました。庶民大衆はそんなものではないでしょうか。国の経済が破綻しても、庶民どもは、したたかに生きていました。お金がなくとも物々交換で。

ポツダムへ行った　ー　東西冷戦の現実

ここで、ちょっと変った体験の話。

1963年にポツダムへ行きました。偶然にも８月15日でした。ベルリンの西南、サンスーシ宮殿群の一つ、ツェツィーリェンホーフ宮殿は、その18年前、米英中３国首脳の「ポツダム会談」の舞台でした。会議場は当時のままに３国の旗を立てて保存されていました。今、サンスーシ宮殿群は、世界文化遺産になっています。

52年前の当時、ここは東ドイツでした。ベルリンの壁が出来てちょうど２年目。日本では「壁」は東西を完全に遮断していたと理解されていますが、東から西へ、西から東へ、通勤していている人がいました。Ｓバーン（山手線のような環状線）、Ｕバーン（高速道路）は、ぐるぐる回っていて、パスポートが必要ですが、決まった駅で出入できます。17日、私たちはＳバーンで、フリードリヒシュトラッセ駅から西ベルリンの動物園前駅へ抜けました。私たちとは、年齢順でいうと内田祥哉・川上玄・田村明・笹倉徹・山本和夫・三輪泰司の６名。すべて30歳代で、私が最年少、満32歳でした。

７月11日、横浜を出港して、１ヶ月余、旧ソ連・東欧で過ごしています。日本建築学会と建設省が派遣した調査団で、目的は戦後日本の喫緊の課題であった住宅建設のため、当時最も進歩していたソ連のプレハブ技術の導入でした。結果はコズロフ方式と言った大量生産では、忽ち過剰生産になる、日本の国情にあった方法の研究開発がベターだと分かり、調査団は東ベルリンで解散。あとは、勝手にというわけで、以後６人で、或いは３人で、時には１人で、ヨーロッパで勉強しまくったのです。但し、外貨持ち出し制限に、為替レートは、１ドル=360円の時代。貧乏でした。

当時、ソ連は宇宙開発でリードしていて、ちょうど初の女性宇宙飛行士・テレシコワさんが、コールサイン「ヤー・チャィカ：私はかもめ」と言って宇宙ドッキングに成功した直後でした。成功を見越して２枚続きの記念切手が発行され、チャィカという銘柄のウオッカが発売されていました。

アメリカはまだプロペラ旅客機、ソ連はジェット機でした。シベリア上空でオーロラを見ました。都市づくりも東側に勢いがあり、東ベルリンはとても美しく安全で、西ベルリンへ抜けたとたん、乞食は多いし、スリにご注意というありさまでした。

東側は国による分業体制で、自動車はチェコのシュコダという具合で一見合理的。権力集中は意志決定が早いが批判がない。大開発は環境破壊を招き、25年もすると制度ごと破綻しました。これをもって「自由」へ短絡するのでなく、「自然」をお勧めします。自然な人間が出せるように、抑圧や差別をしないことです。

紅の血は燃ゆる　―　「伝承」への変局点

西陣空襲の約半年前、1944年（昭和19年）12月７日、満14歳４ヶ月の私は衝撃的な事件に逢いました。

その年の４月、京都府立京都第三中学校（旧制中学校で５年制、場所は今の山城高校）へ入学しました。ところが、７月３日、上級の３・４・５年生600名が、通年学徒勤労動員で、愛知県の知多半島にある中島飛行機半田製作所へ出発してしまいました。偵察機や爆撃機の組立です。１・２年生はまだ労働力としては未熟だと農業動員で、巨椋干拓地での麦刈り、田植えです。学校は三菱重工の発動機工場になって、時々完成したエンジンの試運転をします。学校中が震えるものすごい騒音で、授業どころ

「紅の血は燃ゆる」表紙　良慶師 97 歳の書「青松立白石」

ではありませんでした。

12 月 8 日は、開戦 3 周年・大詔奉戴日の式典で平野神社へ集合でした。藤森勝郎校長から悲痛な告知。前日 7 日、午後 1 時 36 分、突如襲った「東南海地震」で、京都三中生にも犠牲が出た。式は中止、直ちに帰校。12日、京都駅へ遺骨迎え、13日学校葬。

戦後、1971 年（昭和 46 年）12 月、私たちの 2 年先輩になる、京大土木工学科教授になられた天野光三さん、俳優の田村高廣さんらのクラスが、読売新聞社から「紅の血は燃ゆる」と題する学徒勤労動員の記録を出版されました。「紅の ‥‥‥」とは、学徒動員の歌の一節です。田村さんは「戦争を知らない人たちが、この貴重な記録によって、戦争とは何かを考え、われわれの世代との対話のきっかけになってほしい」とこの本に託されています。

記録では、死者 871 名の内、96 名が勤労学徒。半田高女生 29 名、豊橋高女生 23 名、京都三中生 13 名。震源からかなり距離があり、半田市街の被害は大きくなかったのに、その工場は、元紡績工場であったのを、飛行機を作るので、柱を抜き、秘密保持のため、出入り口に衝立を置いていて飛び出せなかったのだそうです。

この記録の主な部分は、亡くなった落合規秀さんらの日記によっています。お母さんが、仏壇に置かれていたのです。涙の跡が滲みていました。京都三中生だけでなく、半田高女生・豊橋高女生らからも寄せられた膨大な資料・文章によっています。

記録には、皇国の危機に、資材不足の中、一機でも多く、一刻でも早く前線へ飛行機を送ろうと、任務に邁進する姿が綴られています。学生の本分は学業です。「勉強こそがお国のためではないか」と悩みます。学業の遅れへの焦りも滲んでいますが、不満や、自分たちをこのような状況に追い込んだ指導者への批判は一言もありません。

さすがに、終局近くには、相次ぐ敗報が伝わり、気持ちがすさみ、遂に若者の不安が爆発してあばれ、憲兵隊の制圧、捜査を受けています。

天野先生に 12 月 10 日の出版前に頂き、一気に読みました。先輩たちの、友を想う気持ち、冷静な記述に深い感動を覚えました。

なにより、ほんの 1・2 年の違いで、ものごとを真面目に考え、克明に記録している先輩がいたことを知りました。なんと自分は、思考停止状態で、幼稚な軍国少年だったのかと、情けなくなりました。時は「戦後」26 年経っていて、満 40 歳。「継承」される側から「伝承」する側へ、いまや変局点にありと意識しました。実行し始めたのは、自らの「年譜」を記録することでした。友達に触発されて、戦後、1946 年 1 月 1 日から、日記を書きはじめていたことが役立ちました。

1971 年は、記念すべき年になりました。「21 世紀の設計」に参加し、事務局も勤め、4 月 23 日に首相官邸で特別賞を頂いたこと。

3 月に、だん王保育園が完成し、4 月 27 日、園長の信ヶ原良文先生に、清水寺の大西良慶管長に、お引き合わせ頂きました。姓名と面相を見て、大西管長が「お前さんを文字で表したらこうなる」と書いて頂いたのが、「青松立白石」です。良慶師・97 歳の書です。6 月 25 日、河野卓男さんの推薦で、京都経済同友会に入会したことと、11 月 12 日、京都東ロータリークラブへ入会を許されたことが合わさって、人生が大きく変わりました。京都東ロータリークラブで、平澤興先生と再びのご縁を頂いたのですが、推薦者である前田敏男先生に、奥田東先生、岡本道夫先生と、京都大学の元・前・現総長が 4 人もおられました。

製図・測量といったスキル・アップを基礎に、20・30 歳代では、建築士・技術士といった資格取得によるキャリア・アップに努めましたが、これは建築学会・都市計画学会・建築家協会など、個人加入団体から経済団体そしてロータリークラブへと、ステイタス・アップが、きびすを接してやってくることが分かりました。

「戦後」“ものごころ”付いてきた 15 歳から、25 年にして「継承」が個人的レベルから、社会的レベルへ質的に変容してきたのです。「継承」はステイタスを伴う社会的責任と結びつくことで、“卒業”の域に達し、次の社会的責任を伴う「伝承」の側へ移って行くのです。そのために「伝承者」側の心構えが求められるのです。

人生の華　ー「伝承」への心構え

関西学研都市建設促進法公布は、1987 年 6 月 9 日。「戦後 42 年」。名実ともに、ナショナル・プロジェクトに持ち上がりました。構想開始から丁度 10 年。10 歳年取って、満 56 歳になっていました。やれやれ、これで一仕事終わったと、思っていた翌

1988年6月8日、大仕事が現れました。

その時、私は国際ロータリー第2650地区の国際青少年交換委員長でした。その日、京都ホテルにあった地区ガバナー事務所へ行きました。地区委員長は、ガバナーのオフィサーですから、月次報告をするわけです。小谷隆一ガバナーに報告を済ませたところ、「ミワ君、ここからはロータリーとは別のことで、お願いがある」ということです。小谷さんは、京都商工会議所・塚本幸一会頭の副会頭で、京都駅改築事業を担当されていました。

京都駅改築事業は、国鉄（当時）と、地元府・市・会議所との共同事業で、会議所が地元側代表でした。平安建都1200年記念事業なので時間が迫ってくるのに、国鉄と地元の調整がつかず、にっちもさっちも行かなくて困っている。ここは一つプロにアドバイスを願いたいということです。

この年の1月、同じく建都1200年記念の京都経済センター建設事業で、担当の堀場雅夫副頭取に、ゼネコンを集めてコンペをやったが、うまく行かない、どうしたらよいかと意見を求められました。お聞きすると、場所が決まっていない。それでは、呼ばれたゼネコンが困るでしょう。手順を踏んでやりなおしましょうとお応えしたところでした。経済界の皆さん、モノづくりはお得意ですが、地域プロジェクトは苦手のようです。地域プロジェクトの原理は、立地―ロケーションと、中身―コンテンツを合せることで、製造販売業の業態とは違っています。

国土軸上にあり、過去と未来の中間―現代で、駅機能を文化で結ぶという「基本理念」で、両者のコンセンサスを得ることから始めました。

記念事業として、国際コンペが決まっていました。都市計画的条件を踏まえた事業手法決定、事業主体構築から国際的コンペまでを仕切り、1997年9月11日、グランド･オープン。1999年7月、設計･監理を担当した北口広場竣工。11年掛かりました。

社会的責任を負うとは、権利・義務をしっかり確認すること。受託業務は、受託者の代表者が責任を負うのですが、この場合、事業者から任命される国際コンペの「プロフェッショナル・アドバイザー」は個人です。その時、個人として権限を与えられている職務を数えると、ロータリーの地区委員長の他、経済同友会常任幹事、建築家協会理事、奈良市社会教育委員、京都市保育園連盟顧問、四条繁栄会顧問等々。

時に満57歳。40・50歳代は、人生の華、まだ体力も従って気力もあります。職務遂行には耐えられる。問題は「時間」です。人間誰でも平等に一年の時間は8,760時間。個体の生理的再生産、即ち睡眠・食事等と、家庭の慶弔などを除くと、活動に使える時間は、最大限約5,000時間。本来の職業のために費やす時間、急にくる審議会委員等予備をとると、個人的職務に割けるのは、せいぜい年間2,000時間です。責任を持って与えられた職務権限を果たすには、取捨選択が必須です。どこか減らさねばなりません。

1989年4月13日、JR京都駅改築国際的建築設計競技プロフェッショナル・アドバイザー就任受諾。6月6日、アルパック役員会で代表取締役社長退任。経営運営は金井萬造社長に任せ、会長職は「伝承」に属する社会的職務に重点を置くことになりました。前年、小谷さんに“打診”されてすぐ、7月6日、経済同友会の視察団参加の機に、1日早く出て、パリのUIA本部を訪問し「国際コンペ」を勉強しました。UIA（国際建築家連盟）の「国際建築・都市計画競技規準」で、自分の職務と権限を確認しました。

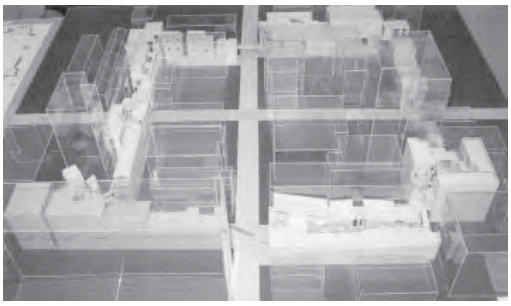
伸びる若い力　―　路地のデザイン

子どもたちにはこのまちは、教室の続きでした。路地という路地は知り尽くしていました。行止まり、抜けられる、途中で二股になっているのは、パッチロージと名付けていました。

“路地”には面白い知恵がいっぱいです。お地蔵さんがあって、行止まりと見えるのに、その両脇の板をポンと押すとスッと開いて、向こう側の路地に繋がっているのです。路地の入り口で火事が起っても避難できるのです。庶民どもは千年も前から、一見脆弱な木造長屋の町並みを安全な街にしてきました。

ところが、向う側の路地が地上げされてマンションになって、抜けられなくなっていました。マンションを建てたらイカンというのではない。まちの知恵を受継ぎ、裏で繋がるようにすればよいではないか。それが出来る都市計画手法を発明することが、プロの役目ではないか。

2000年4月、新編成の京都造形芸術大学で、環境デザイン学科長兼大学院専攻長に就任して最初に担当した大学院生に、高橋梢さんがいました。彼女の修士号申請作品の論文『「うらまち」に見られる



高橋梢作：うらろじを繋ぐ建築模型

ヒロシマ・エキスカーションの交換学生

秩序性と豊かな空間性についての考察』がすごいのです。裏路地を繋いでいって、住宅とギャラリーやレストランや、ブティックやらにしてしまっています。中京区の路地空間で表現して見せたのです。

彼女は見ていないのですが、これはアムステルダム市立歴史博物館だ、と直感しました。それは、16世紀の孤児院の跡からはじまり、裏路地へ繋がり、道を跨いでどんどん伸びています。付け加えますと、彼女は、修士号を取得して後、福井工業大学教授の内村雄二さん（アルパックOB）に師事して工学博士号を取得。富山の土木コンサルタントの遠藤剛さん（アルパックOB）について土木技術も学び、福島へ戻り、故郷のために貢献しています。ここまでくると、路地遊び仲間たちに“ドヤ、面白いことしてるやろ”と胸をはれます。“伸びる若い力”を信じること、これが受けてきた「継承」を、次へと「伝承」する者の心得です。

平和の誓い　―　世界へ拡がる

晩秋の広島、はじめて平和記念館へロータリーの交換学生を連れて行った時、30分もすれば退屈して出てくるかと待ったのですが、２時間も経って出てきたら、目を真っ赤にしていました。夕食を済ませて、オーストラリアの学生代表が、立ちあがって上手になった日本語で、スピーチしました。「ロータリーの皆さん、ありがとうございます。後輩たちのために、このプログラムを続けて下さい」と。

1990年秋に始めた第2650地区国際青少年交換委員会の「ヒロシマ・エキスカーション」は、25年になります。延べ500名以上が来ています、北半球のアメリカ、カナダ、ヨーロッパ、南半球のオーストラリア、ニュージーランド、ブラジル、南アフリカ等々、ふるさとへ「ヒロシマ」の感動を伝えています。

奉仕の「伝承」が報われるとは、これなのです。

「原爆目標としての京都」

当時の他の大都市が戦争の被害を大きく受けていたのに比べ、京都の市街地の受けた被害が大きくなかった理由として、以前はよく、米軍関係者が京都の文化財の価値を認め、その保全を図ったからだと言われていました。

しかし、近年になって米軍の機密情報の開示が進んだことにもより、京都の市街地への空襲が少なかった理由が、米軍が文化財の保全を図っていたからではなく、当時の米軍が原子爆弾の投下候補地の筆頭に京都を挙げていたからだと分かっています。また、京都は北、東、西の三方を山に囲まれているために、原爆による爆風の効果がより大きくなり、候補地として適切であるとも考えられていました。投下予定地は、市街地と工場の両者を効果的に破壊できるところとして、京都駅の西側の梅小路機関車庫が定められていました。

京都にとって幸運なことに、その後、京都は原爆の候補地から外れています。それは、古の都であった京都に原爆を落とすと、天皇を崇拝していた当時の日本国民の反感を買い、戦後の占領政策に悪影響を与えるという理由です。ただし、その後も幾度か原爆の候補地として検討されていました。

京都の代わりに候補地の筆頭になったのが広島です。また、新たに候補地に加わったのが長崎でした。

もし、京都に原爆が落ちていたら、京都のまちの姿は大きく変わっていたでしょう。その場合、京都のまちを舞台としたアルパックの業務も、現在とはかなり違うものになっていたかもしれません。

（長沢弘樹）

日本の地図を元に米軍が作成したもの。原爆で壊滅的な被害を受けるとされる地域が、半径2.4kmの円で示されている。
資料「立命館大学国際平和ミュージアム 常設展示詳細解説」に加筆

初めてのミラノ、フィレンツェ、クラクフ～京都商工会議所会頭ミッションに参加して～

代表取締役会長／杉原五郎

このたび、京都商工会議所会頭ミッションで、ミラノ（イタリア）、フィレンツェ（同）、クラクフ（ポーランド）を訪ねました。6月6日（土）から14日（日）まで、実質1週間ほどの充実した実りの多い視察でした。

食をテーマとするミラノ万博を視察、世界に広がる日本の食文化

6日（土）の朝10時過ぎに関西国際空港を飛び立って、フランクフルトを経由してミラノのマルペンサ国際空港に夕刻に到着。翌7日（日）の午前、ミラノ万博の会場（148の国・地域・国際機関が参加）を訪れました。110haの広い会場は、大勢の見学者で早朝から賑わっていました。

最初に訪れた日本館は、ユネスコの世界文化遺産に登録された日本食を世界に向けてアピールすることを目的に、日本政府との連携のもとジェトロ（日本貿易振興機構）が運営していました。四季折々の豊かな自然、山と里と海の幸、多彩な和食を支える食器などがビジュアルに展示され、見学コース最後のホールでは、和食を支える日本の食文化の精神（「いただきます」「ごちそうさま」）が巧みに演出されていました。

日本館会場を案内していただいたジェトロのイタリア人女性に、「イタリアの方々は日本の食や食文化に興味をお持ちですか」と尋ねたところ、関心は着実に高まっているとのことでした。

昼から日本館では、京都ウィークのオープニングセレモニーが開催され、山田京都府知事、門川京都市長、立石京都商工会議所会頭を含めオール京都の関係者が勢揃いしました。京都からきた舞妓さん、芸妓さんの舞も披露されました。

イタリア経済を牽引するミラノの中小企業を訪問

8日（月）の午前、ミラノ郊外にある中小企業（オロビアンコ社）を訪問しました。社長であるジャコ・マリオ・ヴァレンティーノさんに工場と本社ショールームを案内していただきました。オロビヤンコ社は、カーボンシート（炭素繊維）に魂を吹きこむとの思いで、先端技術と職人技を融合して付加価値の高いレザー製品を開発し生産しています。工場で働いている若い女性の生き生きした姿が印象的でした。スーツケース1つが1.5万～2万ユーロ（約200万～280万円）と聞いて、我々の常識をはるかに上回る価格に、一体だれが買うのかと驚きの声がでるほどでした。

ちなみに、ミラノはGucciなどブランドショップが集積しており、文字通りファッションのまちです。職人を中心とした中小企業が集積するミラノなど北部イタリアの諸都市は、貧しい南部イタリアとは対照的にイタリア経済を牽引しています。

フィレンツェ・京都姉妹都市交流50年の記念式典に出席

9日（火）の午前、フィレンツェ商工会議所を表敬訪問し、市役所の500人ホールで、フィレンツェ・京都姉妹都市50年の記念式典に臨みました。フィレンツェ・京都両市の市長と市議会議長、在イタリア日本大使が出席して式典が行われました。京都からは私たちミッション参加者を含め約300名が出席しました。式典の最後に、イタリアにいる子供たち（日系）が「上を向いて歩こう」など数曲を日本語とイタリア語で合唱しましたが、草の根国際交流の微笑ましいひとときで感動しました。

フィレンツェは、イタリア北部にあるトスカーナ州の州都、

ミラノ万博の日本館を見学する海外の人々

フィレンツェの市街地（ベッキオ橋周辺）

観光客であふれるフィレンフェの広場

ルネッサンス発祥の地として有名です。アルノ川がまちの中央を流れ、周囲が山に囲まれた盆地に発達した都市という点でも、京都と似た地形的特徴を持っています。かつてイタリアの首都であったことでも京都と共通しています。ちなみに、フィレンツェの人口は、約36万人（京都約147万人）。

50周年の式典会場でも、夜の京都市交響楽団による演奏会でも、京都市の平竹さん（市民文化局長）にお会いできたのは奇遇でした。

ポーランドの歴史都市クラクフを歩く

フィレンツェからフランクフルト経由でクラクフ行きの飛行機が天候のせいでキャンセルとなり、一日遅れで11日（木）の夕方、ポーランドのクラクフに着きました。クラクフの街は、ポーランドの京都とも言うべき歴史都市でした。12日（金）の早朝、クラクフの中心地を散歩しましたが、石づくりの通りは、重厚な落ち着きがあり歴史を感じました。トラム（路面電車）が静かに街の中を流れるように走り、清楚な印象でした。

ポーランドは、第二次大戦で隣国のドイツとロシアに占領され、首都ワルシャワなどは壊滅的な戦災を被りましたが、クラクフは、ドイツ軍の侵入を余儀なくされたものの街の破壊はまぬがれ、歴史都市の景観はそのまま維持されました。

クラクフの街を語る時、ユダヤ人への迫害のことにふれないわけにはいきません。クラクフからバスで2時間ほどの所にアウシュビッツがあり、約3キロ離れたビルケナウとともに、ホロコースト（大量虐殺）の舞台となった所として有名です。

年間160万人の人々が世界遺産である強制収容所を訪れていますが、その6割は15歳から25歳の若者です。ポーランド政府とEUは歴史教育を重視していると日本人のガイドさんから説明をうけました。

会頭ミッション参加者との交流を通じて、アルパックの企業価値の重みを実感

今回の会頭ミッションには、立石会頭、柏原副会頭、福永副会頭をはじめ、京都商工会議所の多彩なキーパーソンが参加されました。

京都新聞の白石社長、大垣書店の大垣社長、天橋立にある国際観光旅館幻妙庵の女将、はんなりやの代表を含めた4人は、京都市北区にある紫明小学校時代の同級生。大阪ガス京滋地区総支配人の小西さんは、慶応大学のラグビー部の出身で、バックスとして活躍された。富田屋の田中さんは、明治初期からの老舗の呉服屋を受け継いで、築130年の歴史的な町家を生かして、着物の着付けやお茶など京都の文化体験の仕事をされています。宝酒造の大宮さん（副会長）から、昭和30年代にビール事業に手を出して失敗した経験とバイオ事業に展開して成功した体験談をお聞きました。「成功体験は経営を発展させていくときに大きな障害になる」としみじみ語っておられたことが印象に残りました。

このたびの会頭ミッションに参加して、アルパックが京都で生まれ、育ち、成長してきた企業であることを再認識し、アルパックの歴史と企業価値の重みを実感しました。

天空都市「マチュピチュ」へ～チャスキが走ったインカ道の魅力～

地域再生デザイングループ／岡崎まり

インカ帝国の「幻の天空都市」マチュピチュ。その魅力的なフレーズや写真・映像で見る姿に惹かれ、一度は訪れたいと思う人も多いのではないでしょうか。私もその中の一人で、ついに念願がかなって今年の6月初旬、マチュピチュへ行ってきました。

マチュピチュに行くためには、まず世界遺産に登録されているクスコに降り立つ必要があります。クスコはインカ帝国時代の首都であり、天空都市と呼ばれるマチュピチュより更に1,000mも高い標高3,400mのところに位置しています。いきなり富士山より高いところに行くため、高山病にかかる人が多いのですが、地元の人はコカ茶を飲んで頭痛等を和らげるそうです。周辺のカフェでは軽い高山病にかかった観光客向けや地元の人向けにコカ茶が振る舞われていました。

その後、クスコからオリャンタイタンボへ向かい、そこから鉄道に乗ってマチュピチュ村を目指しました。マチュピチュ村からはバスに乗り、山道をのぼると、そこにはずっと憧れていた天空

マチュピチュ遺跡

写真上：インカの道　写真下：太陽の門

都市の風景が目の前に広がっていました。

実際にマチュピチュに行ってみると、遺跡に魅了されたのはもちろんのこと、インカ道に興味を惹かれました。インカ道はインカ帝国時代に整備された道路のことで、総延長４万キロにのぼります。帝国を縦走する形で、海岸沿いに１本、山の中に１本の南北方向の幹線道路が配置され、両者を結ぶ形で東西方向に支線が設けられていたそうです。この帝国中に張り巡らされたインカ道には、チャスキと呼ばれる飛脚が配置され、国を統治する上で非常に重要な情報が行き交っていました。

インカ道の中にマチュピチュへ続く道があるのですが、奇跡的にスペイン人に発見されなかったため、インカ式の石畳の道だけでなく、多くの遺跡が現在も残っています。外国人の観光客にはこのインカ道を３泊から４泊程かけて歩いてマチュピチュを目指すインカトレッキングが人気だそうです。ただマチュピチュ遺跡を見るだけでなく、古代にどのような道を通って、人や物資、情報が行き来したかを体感できるなんて想像しただけでわくわくします。私は今回の旅の中で３泊かけてトレッキングする時間を取ることはできなかったのですが、少しインカ道を歩いて太陽の門（インティプンク）やインカ橋を見て回ることにしました。

日本の集落などを見ていてもそうですが、私は地域の境界線が見え隠れする場所に魅力を感じます。マチュピチュにおいても、絶壁にへばり付くように延びた石積みのインカ道が途中で途切れて丸太が渡されているインカ橋に、外とつながることの重要さと外敵の侵入を防ぐことで独自の文化を守ってきた姿を感じ、一番のお気に入りスポットになりました。それにしてもインカのチャスキはすごい道を走り抜け、情報を帝国中に伝えていたんだなぁ。もう一度マチュピチュに行く機会があれば、今度は必ずチャスキが走ったインカ道をたどってマチュピチュ遺跡を目指したいと思います。

絶壁にかかるインカ橋

MEDIA WATCH

紹介者／建築プランニングデザイングループ
鮒子田　稔理

『三度戦争に行った父と私の物語』

著者：たなかやすこ
発行者：たなかやすこおはなしの会

昭和30年代半ば、法円坂のマンションで暮らす２組の若き夫婦。一組は私の両親で、もう一組がこの本の著者、たなかやすこさんご夫婦でした。

今で言うところの「ママ友」です。

たなかさんはその後羽曳野に移り住みましたが、平成６年に父親の看病をするため、生まれ育った空堀の実家へ帰り、60歳を前にして両親を看取り、その後夫も亡くなりました。残されたたなかさんは30歳代より患っている糖尿病のため、60歳まで生きられないだろうと年金なども解約していました。働きにでる体力もありません。食べていくために自分にできることは何かと考えたとき、晩年の父が好物のエンドウ豆の天ぷらをあてに１合の晩酌で上機嫌になり、澤井亭の寄席でエンタツ・アチャコの早慶戦の面白かったことや戦争体験などをきっすいの大阪弁で語ってくれたことを思い出し、「そうや、これをおはなしにして語ろう」と決めたそうです。

平成８年から「おはなしのたび」というミニコミ誌を自身で製作し、生まれ育った空堀のことや昔から語り継がれてきた物語などを語るおはなしサロンを築100年の空堀の自宅で月一回開いてました。

まだ、おはなしでお金をもらうということもあまりない時代でしたが、「私にはこれしかない」ということと、「誰かが語り継いでいかなければいけない」という使命感があったのではないかと思います。

おはなしサロンは徐々に共感する人が増え、学校や保育園などにも呼ばれておはなしをするようになり、第９回なにわ大賞も受賞されました。

戦後70年を機に亡き父から聞いた戦争体験や自身の生い立ちをまとめた「三度戦争に行った父と私の物語」を自費出版されました。

三度の戦争とは上海事変、日中戦争、そして太平洋戦争です。

太平洋戦争も終わり、自宅はかろうじて戦災を免れ戦後、捕虜となっていた父、茂さんも終戦１年後に無事に帰って来たという喜びも束の間、戦前営んでいた工場は得意先に預けていた機械が焼失したため再開することができず、一家の生活の困窮は続き、駄菓子などを売って生活費を稼ぐ日々が続きました。

そんな戦中戦後の暮らしぶりは、辛く悲しい物語ばかりでもなく、戦後の混乱を生き抜く大阪人のたくましさやユーモアのエッセンスも含まれています。

５月には、毎年行っている「おはなし会」が開催され、この本の一部も披露され、約200人の方がたなかさんの柔らかな大阪弁のおはなしに聞き入りました。「たなかやすこおはなし道場」では後継となる方も育っているようです。

慎ましく生きる人々の夢や暮らしが無残に奪われる戦争の悲惨な現実を語り継ぐことの大切さを感じさせてくれる一冊です。

樽本修一さんが描く表紙のまちなみのスケッチも心をほっこりさせてくれます。

自費出版のため、お問い合わせは
たなかやすこさん　06-6755-5571
定価800円（税込み）送料別

まちかど

語りつぐべき戦争の記憶

大阪事務所／中村孝子

毎年８月14日に慰霊祭が行われる「京橋駅爆撃被災者慰霊碑」

大阪事務所がOBPに移転して今や25年になります。広大な敷地に建つ緑豊かなオフィス街や隣接する大阪城公園は、私のお気に入りの空間ですが、かつてここにアジア最大の軍事工場「大阪砲兵工廠」があり、大阪空襲で壊滅的な打撃を受けたことを京都からの転勤当初は全く知りませんでした。

しかし、京橋から森ノ宮間に大阪砲兵工廠があったことから終戦前日８月14日に大空襲があり、国鉄に乗っていた乗客が京橋駅に避難したところに爆弾が落とされ多くの人が亡くなり地獄絵図のようやったらしいとか、あまりにも多くの人が亡くなり爆弾が一杯残っているので京橋周辺はずっと更地やったとかの話を母から聞くようになりました。また、JR京橋駅南口にある「京橋駅爆撃被災者慰霊碑」を目にしたり、何度か事務所周辺での不発爆弾の撤去騒動に遭遇して、普段、何気なく過ごしているこの美しい街に今でも戦争の爪痕が残っていることを意識するようになりました。

さて、先日、ピースおおさかの戦争展に行きました。大阪市や堺市周辺は昭和19年12月～20年８月14日間に約50回もの空襲があり、うち８回はB 29戦略爆撃機100機以上の大編隊による大空襲だったそうです。展示物の中には母が家を失った第２次大空襲の記録もありました。堂島ビルヂングまで通学していた母からの繁栄を極めた大阪の街が空襲によって廃墟と化したこと、累々と続く死体の山でまちは埋め尽くされ見ても恐怖を感じなくなったという話が、ますます現実味を帯びて感じられました。

現在、大阪市内には戦火を逃れた近代建築が点在しており、当時の繁栄ぶりを垣間見ることができます。おそらく戦災がなければ、木造家屋も含めもっとすばらしい建物が残っていたことでしょう。

今年は戦後70年という大きな節目を迎えます。戦争体験者の高齢化と減少に伴い、悲惨な記憶は風化しつつあります。しかし、「街に残る戦争の記憶」を通じて、たとえ悲しい記憶であったとしても、土地の記憶を前向きに受け継いでいくことが大切ではないでしょうか。

大阪城の石垣に残る機銃掃射の弾痕

大阪城北西にある旧大阪砲兵工廠化学分析場

arpak アルパック(株)地域計画建築研究所
Architects Regional Planners & Associates・Kyoto
http://www.arpak.co.jp E-mail info@arpak.co.jp ニュースレターはホームページからもご覧いただけます。
この用紙は「びわ湖の森を元気にする」Kikitoペーパーを使用しています。
本　社
京都事務所　〒600-8007　京都市下京区四条通り高倉西入立売西町82　TEL(075)221-5132　FAX(075)256-1764
大阪事務所　〒540-0001　大阪市中央区城見1-4-70 住友生命OBPプラザビル15F　TEL(06)6942-5732　FAX(06)6941-7478
名古屋事務所　〒460-0003　名古屋市中区錦1-19-24 名古屋第一ビル6F　TEL(052)202-1411　FAX(052)220-3760
東京事務所　〒102-0074　東京都千代田区九段南3-5-11 スクエア九段ビル1F　TEL(03)3288-0240　FAX(03)3288-0221
九州事務所　（株）よかネット　〒810-0802　福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F　TEL(092)283-2121　FAX(092)283-2128